

したが、異常知覚は消失した。頸椎手術に際し、自家腸骨より移植骨を摘出することは、よく施行される手技であるが、本症例の如く aberrant nerve の存在もあり、充分注意を要する。若干の文献的考察を加えて報告する。

1B-41) 頭部原発孤立性好酸球性肉芽腫の2例

玉谷 真一・川崎 昭一 (佐渡総合病院)
中里 真二・森井 研 (脳神経外科)

頭部原発孤立性好酸球性肉芽腫の2例を経験したので若干の文献的考察を加え報告した。症例1は6歳男児。半月前から左上眼瞼の腫脹疼痛出現し来院。頭部単純レ線左上眼窩上縁に辺縁 sharp な骨欠損像を認めた。CT scan では骨欠損部に一致して isodensity mass を認め造影剤にて均一に増強された。MRI 所見では、mass は T1, T2 強調像で isointensity, Gd-DTPA にて均一に増強された。手術的に全摘出し、病理組織学的に好酸球性肉芽腫と診断された。術後1年半経過したが現在のところ再発をみていない。症例2は37歳女性。2ヶ月前から右頭頂部の腫脹疼痛に気づき来院。頭部単純レ線上下右頭頂骨に辺縁 sharp な骨欠損像あり、MRI 上同部に T1, T2 強調像とも mixed intensity で Gd-DTPA にて heterogeneous に増強される mass を認めた。骨シンチでは同部に集積像を認めた。手術的に全摘出し、病理組織学的に好酸球性肉芽腫と診断された。術後1年経過したが、再発は認められない。

1B-42) Pleomorphic xanthoastrocytoma に類似した2症例

安齊 公雄・西谷 幹雄 (函館脳神経外科)
高坂 研一・大里 俊明 (病院脳神経外科)
岡 亨治・末松 克美 (中村記念病院)
中村 順一 (脳神経外科)

今回我々は、1979年に Kepes らが報告した Pleomorphic xanthoastrocytoma に類似した2症例を経験したので、若干の文献的考察を加え報告する。

【症例1】15歳の女性で、痙攣発作にて発症するも CT、脳波上は異常所見は認めなかった。2年後、CT 上右頭頂側頭葉に cyst を伴う小腫瘍が発見され全摘出術を施行した。病理所見では、mitosis, necrosis に乏しく、astrocytic であるが pleomorphism を呈する腫瘍細胞が認められたが、glioblastoma multiforme の診断であった。1年半後の現在でも、再発は見られず外来通院中である。

【症例2】頭痛にて発症した17歳の女性であるが、CT にて右側頭葉に cyst を伴った腫瘍が認められた。摘出術を施行したが、正常脳組織と cyst wall が一部境界不明瞭であった。病理所見では、mitosis, necrosis 共に乏しかったが glioblastoma multiforme の診断であった。再発は見られず、現在経過観察中である。

1B-43) 脳梗塞にて発症した Sphenoidal mucocele の1例

太田原康成・日高 徹雄 (岩手医科大学)
小川 彰 (脳神経外科)
長谷川晴彦 (山本組合総合病院)
(脳神経外科)

蝶形骨洞 mucocele は、解剖学的位置から、発育方向により多彩な神経症状を呈する。我々は、内頸動脈閉塞による脳梗塞で発症した稀な症例を経験した。

症例は49歳男性。発症前から頭痛が著明であった。右上下肢不全片麻痺と軽い構語障害にて発症した。蝶形骨洞からの占拠性病変は mucocele であり、Trans-sphenoidal approach にて全摘出した。術後、頭痛は消失したが、右不全片麻痺の程度は不変であった。内頸動脈の閉塞は、mucocele による圧迫と炎症により生じたと推測した。

蝶形骨洞の近傍には、内頸動脈・海綿静脈洞・脳神経・下垂体組織が存在し、病変の発育により様々な症状を呈する。しかし、脳梗塞で発症した症例は、検索し得た限りでは報告をみない。ただ1例の左内頸動脈閉塞例があったが、側副血行路の発達により脳梗塞には至らなかった。

1B-44) 間脳部ゴム腫の1例

杉村 敏秀・橋爪 明 (旭川医科大学)
大神正一郎・米増 祐吉 (脳神経外科)
竹井 秀敏 (同放射線科)
稲積 文子 (稲積眼科医院)

神経梅毒は、最近 HIV の感染との関連で報告が増えているが、今回我々は、Weber 症候群を呈した間脳部ゴム腫の1例を経験したので報告する。

症例は51歳女性、複視で発症し顔面を含む左不全麻痺も出現し Weber 症候群を呈していた。CT scan 及び MRI で右中脳から視床下部にかけて、境界明瞭で内部が均一に enhance される mass とその周囲に浮腫像を認めた。血清学的検査で、STS, TPHA 陽性であり FTA-ABS, FTA-ABS IgM を測定、活動期の神経梅毒で cerebral gumma と診断した。尚、HIV の感染は無かった。ペ